

「理学療法+ホスピタリティ+体現できる力+仕組みづくり」で、活躍の可能性を広げる

門田正久 さん

理学療法士
株式会社ケアウイング
代表取締役・NPO法人ケアユニティッド 理事長



理学療法士として日本における スポーツ医療の発展をサポート

日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー、日本パラリンピック強化本部委員として、数多くのアスリートをサポートするとともに、adidas Training Academyでのトレーナー育成や、フィットネスクラブのトレーナー育成に至るまで、幅広く活躍している門田正久さん。

理学療法士の道に進んだのは、高校を卒業しすぐ。高校時代にボート部に所属し、毎日ひたすらスクワットとデッドリフトをしていた門田さんに、医師だった叔父が「理学療法士」を紹介した。当時、「理学療法士」に自分の体力は活かせると感じたものの、「スポーツの仕事」とはまったく繋がらないまま、勉強と修業の日々がスタートしたという。数少ない理学療法士の一人としてマルチに対応できるようにと、休みの日には関西や関東に足を運んでは見識を広げていった。そこに転機が訪れる。

勤務していた救急病院が、リハビリ病院を新設することになり、その設立スタッフとして抜擢された。そして2年目に入る頃、当時の病院理事長・岡本則昭先生から駅伝チームのサポートをする話が舞い込んだ。ちょうど同時期に、ブックハウスHD社出版のスポーツケアの書籍で、ドイツの理学療法士が高跳びの選手をサポートしている記事を読んだばかり。そこから「理学療法」と「スポーツ」が繋がり、理学療法士としてスポーツの仕事を追及する日々がスタートする。リハビリ病院では、プロ野球チームやプロサッカーチームのメディカルチェックなども担当。



休みの日には、日本体育協会スポーツ診療所の川野哲英氏のもとや、関東でスポーツ整形外科を展開していた整形外科病院など、1980年代前後に発刊された専門誌『臨床スポーツ医学』や『トレーニングジャーナル』に紹介されている現場に足を運んでは、理学療法士としての臨床や、アスリートのサポートに活かしていった。

そのリハビリ病院で知り合った寛田司先生（現、B1チームドクター）との縁で、グループ法人の医療法人飛翔会でのスポーツクリニック運営に参画。クリニック以外での業務を受託する株式会社ケアウイング及びNPO法人ケアユニティッドを設立し、adidas Training Academy・TRX・テクノジム・パワープレートなど、トレーニングメーカーのアカデミー事業などをサポート活動や高校や実業団へのトレーナー派遣活動などを展開している。

理学療法士トレーナーの強みと弱み

門田さんは、理学療法士としてのキャリアについて、『理学療法士』という職業には医療法的制限が多くあるものの、『理学療法』という学問は自由に使える。学んだことを活かすことで、キャリアの可能性は無限大に広がる」と話す。

その一方で、「理学療法士」の身体に関する知識は高いものの、ビジネスについての知識には全く触れる機会がない。理学療法士には開業権もなく、医師の指示のもとに患者を診ることから、クライアントの集客や定着努力に無縁のままキャリアを積むことになりがちだ。そのため、理学療法の基礎を固めつつ、キャリアの選択肢を広げるうえでは、民間フィットネスクラブでのトレーニング指導やリコンディショニング、スポーツリハビリ部門や疾病予防施設を持つ病院に進路を見つけることを勧めている。

また近年、理学療法士の専門学校や大学で学ぶ学生のなかにも、就職先として病院以外のヘルスケア領域に進むことを考えている人が増えていることを受けて、門田さんは、アディダスと進めてきているadidas FUNCTIONAL TRAINING アカデミーのカリキュラムを、理学療法士や医療従事者養成校に導入する取り組みを進めている。

門田正久さんのキャリアステップ

1985年 国立呉病院付属リハビリテーション学院卒業 理学療法士取得
1986年 医療法人社団朋和会西広島リハビリテーション病院
1988年 飛翔会グループ(当時、寛田クリニック)
2000年 日体協(現日本スポーツ協会)AT取得
2004年 アテネパラリンピック本部帯同トレーナー
(2008年北京、2012年ロンドン、2014年平昌、2016年リオ本部トレーナー帯同)
2005年 株式会社ケアウイング代表取締役・NPOケアユニティッド理事長
2008年 日本パラスポーツ協会認定トレーナー制度策定(以後運営責任者)
2009年 athlete performance center(現EXOS) level 1 以後 level2・reha認定取得
2010年 adidas Training Academy
(現:adidas FUNCTIONAL TRAININGアンバサダー)
2021年 東京2020医療関係調整部会 部会員
2022年 日本パラスポーツ協会 強化本部トレーナー部門長
これまでにJリーグ選手、プロ野球選手、Bリーグ選手、パラリンピック選手など多くの競技者のサポートを実施。

みを進めている。

理学療法士の仕事では、自分で体現するスキルは求められないが、スポーツ分野で仕事をする場合、指導者自身がやって見せて、学ばせることの重要性が高い。「スクワットでも、まずトレーナー自身ができなければ、選手たちに見限られる」と話し、ファンクショナルムーブメントも含め、学生時代から自分の身体で表現できるようにトレーニングを実践することを勧めている。

理学療法の現場で使うスケールや評価方法を導入して、サービスを仕組化

理学療法による機能改善の有効性に注目が集まる中、フィットネス分野でも理学療法士の資格を持つトレーナーが活躍はじめており、フィットネスクラブ入会システムとして理学療法士考案の「Supine dynamics理論」からのサービスを組み込むプロジェクトを推進している。

多くの入会者の方々に適切なサービスが提供できる仕組みとして、理学療法で使っているスケールを活用し、それぞれの方の課題とレベルをカテゴリーに分けて課題を改善するトレーニングを提供する。このスケールは、門田さんが理学療法士として駆け出しのころ勉強に行った脇元幸一氏(医療法人社団SEISEN設立代表者)から指導されたものをコンセプトを応用したもので、筋組成測定により筋量を測定し、椅子から立ち上がるまたはレッグエクステンションで筋出力を確認する。この2つの測定値の組み合わせで、まず「重力のなかで立ち上がる」うえでの課題を解決していく。

さらにパーソナライズしたサービス提供には、2009年・2013年にそれぞれ渡米して学んできたFMSや、SFMAなどのスクリーニングや評価を導入することで、その人の課題を共通言語化して、理学療法士やその他の専門職、フィットストレーナーや、S&Cコーチがそれぞれに専門性を発揮してサービスを提供しやすい環境を整備している。地元B1チームのU15/U18全員のスクリーニングを3年前より着手、NPOから派遣している高校やクラブチームでも展開を推進している。